

共同研究報告 ドイツ語圏現代文学の諸相

——オーストリアを中心として——

テーマ：ドイツ語圏現代文学の諸相——オーストリアを中心として——

1. 研究構成員

学内研究者：

森田明、土屋勝彦、ポガチュニク（本学前期客員教授、ベルガモ大学）、クバチェク（本学後期客員教授、批評家）、オーヴンデン（本学客員研究員、ノッティンガム大学）

学外研究参加者：

ハレンスレーベン（東京大学文学部講師）、シュマッツ（オーストリア詩人・批評家）、ウィヴァリー（オーストリア詩人）、ルプレヒター（東京都立大学教授）、フォーグル（慶応大学助教授）、メナッセ（オーストリア作家・批評家）ほか

2. 研究会・講演会日程（会場：おもに名古屋市立大学にてドイツ語を使用した）

- 2001年4月 シュマッツ「新たなポエジーを求めて」
- 2001年6月 ポガチュニク「ベルンハルト文学の特質—作品『原因』を中心に」
- 2001年10月 土屋「現代オーストリアにおける言語実験的文学」
- 2001年11月 現代文学ゼミナール「ローベルト・メナッセ・シンポジウム」
- 2001年12月 クバチェク「現代オーストリア文学における日本像」
- 2002年1月 ウィヴァリー「コンピュータ技術と現代ポエジーの方法論」
- 2002年2月 ハレンスレーベン「メディア論から考察した『魔の山』解釈」
- 2001年3月 オーヴンデン「ライヒャルト作品における言語と暴力の諸相」
- 2001年3月 研究総括会

3. 研究成果概要

オーストリア現代文学を中心に、言語と身体の相関性の問題、物語性の復興、新たなポエジーへの模索、メディア論的作品解釈の諸問題、モチーフ分析などを共同討議した。死と饗宴のモチーフにおいて、オーストリアへの社会批判と罵倒の響きが自己増殖するような文体を特徴とするベルンハルト文学、文字言語の限界を突破する視覚的聴覚的言語への志向性を持ちつつ、言語自体が身体性を獲得していくシュマッツの詩世界、異化操作やモンタージュ、コラージュ、開かれた構造的性、詩作方法の自己提示を特徴とするウィヴァリーの前衛詩とパフォーマンス・アート、相変わらず理想化されたエキゾチズムや誤解に基づく日本像が散見されるハントケやゲルハルト・ロートの日本モチーフ、逆に等身大の日本像に近づこうとする作家たちの新たな試行作品、

言語と沈黙の狭間に出現する暴力の諸相をフェミニズム的な視点から展開し「過去の克服」に連関させるライヒャルトの作品世界、トーマス・マンの『魔の山』における蓄音機と絵画の意味を現代メディア論から考察した現代文学解釈の試み、など多様な報告がなされた。共同の成果としては、オーストリア現代文学という枠組みを超えて、多様化する現代文学の諸相と新たなアプローチへの試行について共通の認識を得たこと、そして21世紀に向かう文学表現の可能性についても理解を深められたことを挙げたい。学内外の共同研究参加者にこの場を借りてお礼を申し上げる。とくにシュマッツ氏、メナッセ氏、ウィヴァリー氏などオーストリアの現代作家、詩人たちに心から感謝申し上げる。

(文責：土屋)

4. 各報告概要

フェルディナント・シュマッツ報告と朗読

詩のリズム、権力に向かう姿勢、現代への批判精神を、それぞれシュトラム、マンデルスタム、ヤンドゥルから学び取ったことを表明し、それらの基本的な詩人としての姿勢から詩の革新を目指した報告者（シュマッツ）は、現実の認識、理解、構造化のプロセスを根源的に問いかける詩人であり、主体と社会の観点において、身体と言語、そして思想の関係を芸術的に探求するモデルネの前衛運動の一翼を担っている。ダダイズムやシュルレアリスム、コンクレートポエジーの系譜を受け継ぎながら、意味性からの離脱よりも、社会的な文脈やメッセージ性を異化された詩的言語（ローカルな方言から抽象化された言語）に包み込み、それをさらに視覚的、聴覚的な共鳴空間（身体的な言語空間）へと変容することで、従来の文学的言語規範を打破し新たな表現の可能性を拡大しようとする。その際に重要となるのは、内的なプロセスないし情況というコンセプトであり、思考は決して言語構造に還元されるのではなく、思考や感情、知覚と言語表現の双方から由来する心的プロセスに規定される。

グスタフ・アドルフ・ポガチュニク報告

そのスキャンダル性のゆえに、“Die Ursache”『原因』はベルンハルト作品の中では、珍しくベストセラーとなった作品である。自伝小説5部作の巻頭を飾るこの作品は、そのリアリスティックな描写により多くの読者を獲得した。同時期に発表された「哲学的な」小説Korrekturと比べると読みやすいのもその一因であった。この作品の意味は歴史的事実の文学的な普遍化にある。舞台となっているザルツブルクは、ホフマンスタール以来の世界的演劇都市（ザルツブルク祝祭都市）として有名な美しい景観を持った都市であるが、ベルンハルトはそれをナチズムとカトリックが教育システムとして同様に機能した戦争犯罪都市として断罪する。空襲を受けた戦中のザルツブルク体験は、ベルンハルトの心に大きなトラウマとなって残り、忘却に逆らう記憶作業としてこの作品に着手したのである。空爆された街の描写は擬人化や動物に擬せられたオーソドックスな身体的描写となっている。こうした屠殺や窒息のメタファーはベルンハルト作品に頻出する

モチーフであり、彼の個人的な経験に基づいており、それが防空壕で身を寄せ合う人々の無力感へと拡張されている。少年時の感情は、もはや当時の感情を再現しているのではなく、距離を持った語り手の現在（30年後）から再構成される。このような少年の素朴な恐怖感情と後年の審美的距離化という語りの亀裂が見られる。（自伝小説の文学的系譜からみて、ここにベルンハルト文学の新しさがある。）空襲でバラバラにされた人形の手が子供の手へと変容するシーンには子供の遊びと平行に置かれた大人の戦争の遊びが揶揄され、重ねあわされた観念遊戯が見られるが、これはそのグロテスクな残酷さにおいてエルンスト・ユンガーの戦争小説を想起させる。前半部のおよそ3分の2は破壊と死の諸形象の絶え間ない凝集と高揚に満ちている。つまり駅前には並べられた死体の列、祖母との墓参りによる死の光景への馴化（メランコリーのバロック的アレゴリーと結びつく）、語り手のメランコリーを奏でる楽器たるヴァイオリンの破壊、空襲、学校寄宿舎の寝室崩壊、そして最後にこうした経験が合葬墓の形象に焦点化していくのである。こうした根源的な犯罪としての戦争の凄まじさ、つまり破壊された美しい街の黙示録的なタブローのなかに、生き延びる力の諸形象が現出する。ベルンハルトの全作品において見られるこの最後の形象、つまり死の攻撃に対する生の詩的な符牒が現出している。戦争直後語り手が庭師として働き始める話において、この職業こそ自然な生を維持する形象であり、死をもたらす獵師と対峙している。前半部は寄宿舎の破壊で終わっているが、彼ら生徒たち自身、大ドイツの人間教育ないしは人間否定教育の諸規則に従った国家ファシズム的サディズム的な教育原理によって破壊されている。また、寄宿舎の破壊（および寄宿舎長グリーン克蘭ツの失脚）はトラウマの期限の抹消を意味する。

土屋勝彦報告

現代オーストリアにおける言語実験派詩人たちは、言語を省察する過程で、統語論的文法論理的に方向付けられた言語規範からの抽象化を実作上可能ならしめ、抒情主体の現実経験という、伝達手段としての言語の本質から決別した。こうした抽象化において主体の言語的自己同一性は完全に消失する。そして、伝統的な言語規範への関連においては自己同一性が失われるかわりに、言語遊戯的な作業形式が実現される。この形式運動は、80年代半ばのアナグラム的な詩作に代表されるように、意識的に粉砕された言語によって、言語規範の彼岸にある、異なった自己同一性探求と知覚作業を続けていった。こうした意味において、言語の解体傾向は、否定的な実相としてではなく、硬直化した言語観ないし価値観に対する反抗として、変容した意識形式に向けられた。言語実験的な書法の本質的な機能は言語批判という形式であり、言語自体に内包される意識内容としての認識批判と社会批判を目指す。こうした過程で人々の持つ世界構想や主体構想が言語的に条件付けられていることを提示することが必要不可欠となる。言語の創造的使用によって言語的思想的規範化への強制から逃れることを目指した結果、言語実験詩は、純粋に芸術的に規定されうる立場からも逃れえたのである。現代の言語実験派の作家たちは、従来哲学的、認識批判的諸科学に残されている諸領域に対して、言語批判的、意識批判的に方向付けられた言語操作

を目指す。こうした総合的な連関を考慮しつつ詩作への理解を広げることによって、言語的ないし言語分析的な諸努力の理性的な評価を行う基礎が築かれる。言語実験的な諸傾向は、言語との格闘として、そして科学および科学的認識への関心を越えた問題系として理解されうる。しかしそこには芸術至上主義的な前衛詩運動の限界も存在する。

マルティン・クバチェック報告

現代文学における日本像の形成を検討し分類するために、まず様々のテキストのジャンル分けと選択を行った。その結果、旅行記やエキゾチズム現象、冷静な観察対象、審美化された知覚像、文学形式の転用の試み、挑発的な通俗小説の点景等々としての日本像が確認できた。最近の日本小説は、さらに新たな傾向を見せている。例えばゾペティの『いちげんさん』では、外国人男性と日本女性という伝統的エキゾチックな関係形式を逆転させ、日本文学に通暁した外国人男性が盲目の日本人女性を日本の文学伝統へと導いていく。こうした例外的な作品を除けば、全体的にはやはり、最近のテキストも上述した異国的趣味的なクリシェーに陥っているものが多い。例えばハントケの降雪の「こまやかさ」とか、ゲルハルト・ロートやノーテブームの描く誘惑的な日本女性像などである。こうした西欧的な願望像たる規範への反例としては、ブルックナーの青少年図書ベストセラー『サダコは生きようとする』、ライヒャルトの小説『アマテラスの微笑』、マイレカーの詩に現れる北斎像などを挙げることができよう。とくにマイレカーの小品では、日本を経験したことがないにもかかわらず、日本的な感情を数行のうちに凝縮している。

リースル・ウィヴァリー報告と朗読

クバチェック氏による作品および詩人の紹介のあと、ウィヴァリーは作品Im Wahrheitsraum『真実空間』を朗読した。テキスト朗読の後、自作のCDも一部鑑賞した。彼女の詩法は、写真、音楽、テキストという三領域をコンピュータによって統合するという特徴をもっている。そのプロセスは、異化作用、モンタージュ、コラージュ、構造の開放性、行動様式の可視性という前衛的な書法から生まれる。当該作品は、真実空間に住む市民の独自ではじまり、記憶、意識、行為、意味作用、知覚、身体、自然と反自然、社会と権利、文明と欲動、運動、生と死、風景、経験、牧歌といったモチーフが重奏者のように点景化されている構造を持っている。叙情主体もich, du, sieと変転交替しつつ、そのアイデンティティへの希求が拡散していき、同定できない、というより同定を拒絶しているように見える。メッセージ性は断片化されて統一した磁場を持たず、コラージュ風の構成のうちにカオス空間が現出するイメージが残る。いわばバーチャルリアリティと現実との狭間にたちつくす現代人の脳内空間をそのまま写し取ったような意識の流れと感覚である。こうした前衛的に手法は、以前来日し、当研究会でも朗読会を行ったBodo Hellの詩的世界に通ずる。討論では、断片性のゆえに統一的な世界像を結ぶのが難しいという感想や、「真実の私」とは何かをめぐって疑問が出され、反社会的であっても「感情の重荷から解放された」強き自我こそ真実であり、芸術家はそうした予見のない純粹自我によって製作するために、「死

ぬ権利」を持つ「第二の意識状態」において真実の自分を見出すとの回答があった。重層化された叙情主体のありようをめぐる質問も出されたが、ウィヴァリー氏は創作者であり、解釈は読者に委ねるタイプの作家であり、明確な回答はなかった。しかし、こうした前衛詩人の活動の現場に立ち会う経験は貴重であった。

マルクス・ハレンスレーベン報告

トーマス・マンの作品『魔の山』の時代的背景と作品成立史の紹介のあと、技術メディアとしての音楽というテーゼに即して、文化技術としての音楽（反フランス文化、反ヴァーグナー、死とデカダンス）、サンプリングの技術（モンタージュ原理、フランスのモデルネから代表的ドイツ性へ）、モチーフ技術としての音楽（ロマン主義との反語的な対決、没落のシンボルとしての『菩提樹』、シンフォニー構造、音楽と思想の複合体、死への親近性）、物語る技術としての音楽（音楽技術の文学への援用、つまりライトモチーフを直感像的な記号レベルにおいて構造化する音楽技法を、意味論的なレベルにおける小説の意味形成へと置き換えている）、マスメディアとしての音楽（グラモフォンしている）という4つの側面から当該の章を考察した後、メディアとしての言語というテーゼにおいて、明示的に名づけられたメディア（古いメディアから新しいメディアへの移行、主人公の病気や老い、成熟、脱技術化の過程に見られるような物語・変容としての『魔の山』）、魔法の書物と魔法のプレーヤー箱（物語るアルヒーフとしてのレコード、追憶のエレメントとして、カストルプの省察がレコードのアルヒーフとして聴きとりうる、グラモフォンが読む装置となる）、蓄音機のシンボリックな媒介（メディア）機能（グラモフォンが言語と音楽、過去と現在、精神史的・心理学的発展とメディア史的技術論的な発展との間の交差点となる）、メディア構造の二重化として、グラモフォンにおいては語り手の声が技術メディアに録音され、再生されるとき、時代史を文学的声像として反映させる。つまり、レコード上の声の再生産が言語によって再生産されるという二重の再生形式をもつのである。『魔の山』の当該の章をグラモフォンの根源的な意味性から遡行して主人公の語りのアスペクトとして再構成するという、非常に斬新かつ興味深い視点を提供している。教養小説と呼ばれる「教養」の内容も、フランス文明とドイツ文化の対立と捉えるカストルプの省察が、グラモフォンを媒介にして言語化されているという指摘があった。

ローラ・オーヴンデン報告

エリーザベト・ライヒャルト作品における言語、沈黙、暴力のダイナミズムが、いかに文学的に提示されているかを検証した。こうした三者の関係連鎖は、暴力による言葉の封鎖をもたらすが、他方では「痛ましい発話」と「激烈なレジスタンス」をも包含しうる。ライヒャルトは、創出の出発点として様々の「言語喪失の諸領域」やタブーを使用する。そこで、言語喪失やタブーの起こりうる主題として、オーストリアの「過去の克服」という問題と女性の声および主体性の問題（フェミニズム）という二つのキー概念を各作品に跡付けてみた。『二月の影』における女

性主人公の「痛ましい発話」（脱走兵の密告による罪の意識）の解釈、『平手打ち（口）』におけるセクシュアリティと暴力との錯綜したディスコースの問題、『酩酊』における狂気と女性性の概念が疑問視されていくプロセスなど、彼女の作品に通底するモチーフを分析することにより、さらにはイエリネク、ミットグッチュ、シュトレールヴィッツなどオーストリア現代女性作家たちの社会批判的な問題系と語り手の多重性の問題をも抽出することができた。

（文責：土屋勝彦）